

# 未来プロジェクト TSUNAGU21 V

## 〈グループB〉

### 「本物」に触れる機会を提供する選択型の小学校教育システム

飯川 聖人<sup>1)</sup>, 久米 啓太<sup>2)</sup>, 曾我 友太郎<sup>3)</sup>, 本多 美早紀<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>東芝インフラシステムズ(株) 社会システム事業部 水・環境システム技術第一部 技術第一担当  
(〒212-8585 神奈川県川崎市幸区堀川町72番34号 E-mail: masato1.iikawa@toshiba.co.jp)

<sup>2)</sup>(株)日立製作所 水・環境ビジネスユニット 水事業部 東部プロジェクトマネジメント第二部  
(〒980-8531 宮城県仙台市青葉区一番町四丁目1番25号 E-mail: keitakume.sz@hitachi.com)

<sup>3)</sup>東亜ディーケーケー(株) 開発技術本部 水質技術部 水質2課  
(〒169-8648 東京都新宿区高田馬場一丁目29番10号 E-mail: y-soga@toadkk.co.jp)

<sup>4)</sup>(株)堀場アドバンスドテクノ 開発本部 ウォーターソリューションズ開発部 Advanced Design チーム  
(〒601-8551 京都市南区吉祥院宮の東町2番地 E-mail: misaki.hondap@horiba.com)

#### 概要

子どもが学び育つ環境は自身の興味に関わらず出生環境に限定される状況に着目し、小学生が自身の興味に沿った進路選択を全国規模で行い、主体的に学ぶことのできる「選択型小学校システム」を提案する。「主体性」「実体験」「包括性」「地域」の観点から効果について考察し、本システムによって育まれる主体性・チャレンジ精神について述べる。

キーワード：主体性、専門家指導、多様性、地域活性化、包括的教育

原稿受付 2025.1.15

EICA: 29(4) 34-36

## 1. 背景

### 1.1 主体性の重要度の高まり

日本の教育では、教師が主導で知識を教え、生徒がそれを覚える「受け身の教育」が一般的である。この方法は基礎知識を身につけるには適しているが、自ら課題を発見・設定し、解決する力を育むには不向きである。また、受け身の教育では、生徒は正解を得ることを目標とし、失敗を恐れる傾向が強まる<sup>1)</sup>。

一方、現代は変化が激しく不確実性が高まっており、自ら主体的に考え挑戦する力がより重要視される社会となっている。未知の問題に直面したとき、試行錯誤を繰り返しながら答えを見つける「トライ & エラー」の考え方が必要とされ、この力は成功体験だけでなく、失敗も含めた経験を積み重ねることで養われる。

### 1.2 出生環境と子どもの興味の不一致

子どもの知的好奇心を育む教育リソースは都市部・地方部で大きく異なっている。東京をはじめとした都市部は、美術館や博物館など文化施設が充実している一方、地方部は山・海など豊かな自然に触れやすい環境がある。また、各地域に根付く風習・土着文化も貴重な教育リソースとなりうる。しかし、そこにある教育リソースがその地域に生まれた子どもの興味に沿っ

ているとは限らない。

また、近年 SNS や動画配信サービス・VR 等の発達により、興味を持った情報に容易にアクセスできる時代となった。しかしそういったバーチャルな体験は、実際に「肌で感じる」経験とは質的に大きく異なる。

子どもの好奇心を育むためには、自身の興味に沿った生のリソースを提供できる教育形態が必要である。

## 2. 提案概要

そこで我々は、幼少期から主体性を育み、かつ自身の興味に沿った分野を学ぶことができるよう、現存する小学校に加えて、特定の専門分野に特化した小学校を全国各地に設立することを提案する (Fig. 1)。

各小学校はその地域の特性を活かした専門分野を持つことが望ましく、この分野は学問のみならず、産業、技術、芸能、料理など多岐にわたる。例えば、農業が盛んな地域では地域特産品の農業技術を学ぶ小学校、伝統工芸が盛んな地域ではその技術・歴史を学ぶ小学校を設立する。

さらに、専門分野の第一人者や一流の人がその土地に集まり、教員として小学生に教鞭をとることで、バーチャルな体験や座学とは質的に異なる「本物」の体験ができるようになる。例えば、著名な科学者や

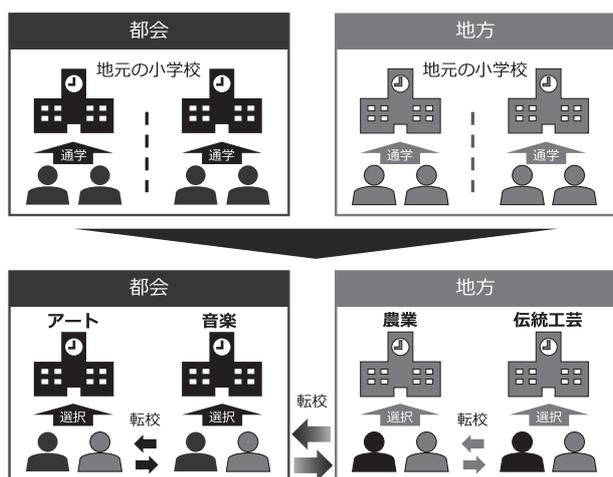


Fig.1 選択型小学校教育システムの概要

アーティストが直接指導することで、子どもたちは教科書では得られない貴重な経験を積むことができる。子どもは自身の興味に合わせて全国の中からいずれかの小学校を選択し、また、一定期間ごとに任意で転校の機会を設けることで、分野変更を可能とする。

### 3. 効果

この提案による効果は次の通りである。

#### 3.1 主体性の向上

本提案により、子どもたちは自分の興味や関心に基づいて学びを進めることができ、学習意欲が高まる。例えば、科学に興味がある子どもは、実験やフィールドワークを通じて実際に体験しながら学ぶことができる。また、アートに興味がある子どもは、地元のアーティストと交流しながら創作活動を行うことができる。自身の「やりたい」ことに真っすぐ向き合う中で夢や目標を叶えるための場所として小学校を位置付けることで、子どもたちは主体的に学び、成長することができる。

一方、選択した分野や環境での学びが思い通りにいかないこともあるだろう。しかし、そのような経験こそが貴重であり、成功や失敗に関わらず、試行錯誤を通じて得られる学びは大きな財産となる。専門分野を学ぶ過程で身につく課題解決スキルは、全く異なる他分野においても活かされることが分かっている<sup>2)</sup>。自ら選んだ環境でのアウトプットは、主体性や「トライ＆エラー」の精神を育む基礎となる。

また、転校による進路の再選択も重要な経験となる。新しい分野や環境に身を置くことで、子どもたちは未知の状況に適応する力を養うことができる。再度挑戦して成功を収めた場合、環境を変えることが新たな可能性を拓く手段であることを実感できるだろう。

このように、「地元の小学校に通い、教科書の内容

を先生から教わる」という従来の価値観から、「何を誰からどのような環境で学ぶかは自分で決められる」という新しい価値観への転換を図ることで、子どもたちは早期から主体性やチャレンジ精神を養うことができる。これにより、変化の激しい国際社会においても、柔軟に対応し、自らの力で道を切り拓くことができる人材を育成することができる。

#### 3.2 実体験から得られる学び

現在の主流な学習方法は座学である。これは学習の初期段階や基礎を築くには適しているが、万能な方法とは言えない。座学は特定の情報をインプットすることに終始しがちで、その背景や情報間のつながり、さらに非言語的な情報が排除される傾向にあるからである。暗黙知は決して無駄なものではなく、表面化した知識体系では把握しきれない具体的な事例や、個人の経験則によって涵養された洞察が含まれており、アウトプットの質を大きく左右するものである。

この課題に対して、提案する教育システムは子どもが各分野の専門家から直接学ぶことができる点で優れている。非言語情報は他者や媒体を介すことで変質・喪失し、教科書と非専門教員による座学では多くの情報が失われる。しかし、専門家と直接的に関わり学ぶことができれば、その真価を損なわずに掴むことが可能になる。

例えば、料理を学びたいと考えたとき、レシピ本・動画や家庭内で基本的な手順を学ぶことはできても、それだけでプロの料理を学んだことにはならない。トリミングされた知識をなぞることと、実物を五感で体験することには大きな隔たりがあり、実体験から学ぶ意義は大きい。「百聞は一見に如かず」と言うように、プロの料理人の手つきや所作、目線を見ることで、今まで気づかなかった観点から料理と向き合うことができるようになる。

上記では料理人を例に挙げたが、本物に触れる意義は“人”だけでなく、“モノ”や“現場の雰囲気”についても同様のことが言える。

また、同じ興味を持った学友との交流も学びに大きな影響を与える。各々の視点で意見を交わし、議論することで新たな発見がある。ケーキ作りの学校を例に挙げると、ケーキの味だけでなくデザインに関心がある子や、材料へのこだわりから農業・畜産に興味を持つ子など、さまざまな子がいるだろう。こだわりの方向性は多様にあり、授業の過程で意外な分野との繋がりに気付くことができ、それが将来の新たな選択肢のきっかけになり得ることも、提案する教育システムの大きなメリットである。

### 3.3 教育機会の包括化

出生と居住の環境は、個人の進路選択に大きな影響を与える。生まれ育った地域や家庭の環境は、その人の価値観や興味、将来の夢に深く関わってくる。例えば、家業を継ぐことを期待される家庭では、自然とその道を選ぶことが多い。また、医者や家庭に育った子どもが医者を目指すこともよく見られる。これは幼少期から親や親戚の影響を受け、その職業に親しみを持つことが大きな要因である。

一方、いくら子どもが強く興味を持った分野でも、周囲に誰もその分野に明るい人間がいなかった場合、学ぶ機会を得ること自体が難しい。その点、子ども自身で分野を選択できるシステムでは、周囲の環境によらず誰もが自分の興味のある分野を学ぶ機会を得ることができる。

また、都会と田舎の子どもたちが同じ学び舎で学ぶことには多くのメリットがある。異なる背景を持つ子どもたちが交流することで、多様な価値観や文化を理解し、共感する力が育まれる。これにより、社会性やコミュニケーション能力が向上し、将来的に多様な社会で活躍できる人材が育つ。

しかしながら、選びたい小学校が遠方にある場合、入学可否は親の就労状況や経済状況に左右される点が課題として挙げられる。その対策として、企業側のリモートワークの推進や勤務地選択の自由、手当交付、また公共交通機関や各自治体、国を巻き込んで移動負担を軽減する仕組み作りが求められる。

### 3.4 地域活性化

地域の伝統文化や芸能も重要な教育リソースとなりうるが、昨今多くの地域で担い手不足が問題視されている<sup>3)</sup>。提案システムでは、より関心の高い子どもを現地に集めることができ、授業を通じて伝統文化の歴史・技術など魅力を伝えることで、将来的な担い手となってもらえる可能性がある。また、伝統文化を保存し情報を発信し続けることで、外部からの資金援助も期待できる。伝統文化を小学校の教育リソースとして活用することで、衰退しつつある文化の魅力を再発見し、活性化のきっかけにすることができる。

また、転校が全国規模で行われる過程で家族も移動することが、地域の活性化につながる。“地元の魅力を活かした小学校”を核として町おこしをすることで、人の往来・住民が増え町は活発になる。若い人が住みやすく子どもに優しい町づくりが進むことで、地域全体の魅力が向上し、さらなる発展が期待できる。地域の活性化は、地域経済の発展にも寄与する。新しい住

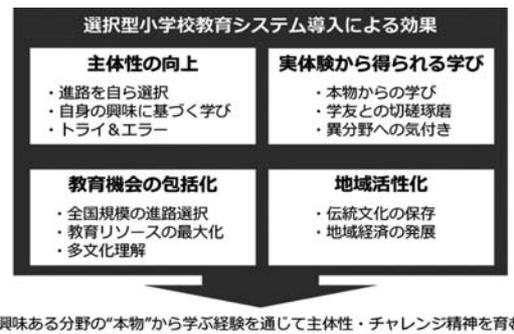


Fig. 2 導入効果

民が増えることで、地域の商店やサービス業が活性化し、地域全体の経済が潤う。また、地域の特産品や観光資源を活用したイベントやプログラムを増やすことで、地域外からの観光客も増加し、地域経済のさらなる発展が期待できる (Fig. 2)。

## 4. ま と め

本稿では、子どもが自身の興味に沿った進路選択を行い、主体的に学ぶことができる「選択型小学校教育システム」を提案した。このシステムにより出生・居住地域に関わらず、興味を持った分野の第一人者から直接学ぶことができ、同じ興味を持つ子ども同士が集まり刺激し合う学びの環境が生まれる。また、地域文化を教育リソースとして活用することで、その保存と発展への貢献も期待される。本稿の著者らも、こういった教育システムを活用することができていたならば、自身の興味に沿った学びを追求し、より主体的に成長できたのではと思ってやまない。

## 謝 辞

本報告書を執筆するに当たり、多くの貴重なご経験・知見をご講演いただいた原田英典様、中里卓治様、深川浩史様には厚く御礼申し上げます。

## 参 考 文 献

- 1) 荒井貴文, 祖父江仁成, 福島知樹, 柴山真穂, 佐藤康徳: 自ら試行錯誤して学習する生徒の育成 —— 高等学校数学科を中心に問題を工夫して ——, 高校教育研究会議
- 2) 小野和宏, 松下佳代, 斎藤有吾: 専門教育で身につけた問題解決スキルの汎用性の検討 —— 遠い転移に着目して ——, 日本教育工学会論文誌 47(1), 27-46 (2023)
- 3) 文化芸術推進基本計画 (第2期) —— 価値創造と社会・経済の活性化 —— (令和5年3月24日閣議決定), 文化庁